

論文

子どもたちが主体的に活動するための保育者の関わり — S 保育園の造形表現の取り組みから考える —

池田 純子

(受理日：2020年7月19日)

Nursery Teacher's Involvement for Developing Children's Independent Activities: Art Activities of Nursery School

Junko IKEDA

要旨

幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂・定により、改めて、子どもの主体性を遊びの中で育むことが明記された。今まで以上に、子どもたちが主体的に遊ぶための保育者の援助や、関わり方が模索されている。そのような中で、子どもたちが主体的に活動することを目標に、保育を見直し、園全体で取り組んでいるS保育園の活動事例をもとに、保育者の変化と子どもの姿を中心に検討をした。

保育者の関わり方の変化で子どもたちの遊びが主体的になったということがわかったが、この変化の要素は、保育者の持つ意識の変化であることが明らかとなった。また、保育者の意識を変えていくのは、保育者の専門性の向上にも挙げられる、園内研修や外部研修等の保育者一人一人に合った研修であることも示唆された。

キーワード：保育者の主体性、子どもの主体性、造形表現、保育者の専門性の向上

1. はじめに

「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園 教育・保育要領」が改訂・定されたことで何が変わったのか、変わらないのか。秋田¹⁾は環境を通しての教育と、総合的な遊びが中核であること、これは変わりません。今回、「資質・能力」がうたわれたのは、新しい時代に生きる子どもたちの生涯にわたるウェルビーイング、幸せな生き方を育てていくためには、知識・技能だけではない「資質・能力」が大事にされてきているということです。「資質・能力」は乳幼児期からずっとつながっていくということがポイントの一つです、と述べている。また、大豆生田¹⁾は今回の改訂・定で保育観が大きく変わるものではなく、それぞれが保育を見直すきっかけになるのだということ、つまり、改めて、子ども主体の遊びや学びが重要

だと位置付けられたと言ってよいのではないでしょうか、と述べている。子どもたちが環境を通して、「主体的・対話的で深い学び」を遊びの中で育むために、保育者が保育を見直す必要があるといえよう。

子どもたちが主体的に遊ぶためには、中坪²⁾が述べるように、子どもは大人から知識や技能を与えられて身につけるのではなく、子ども自身が自分の欲求に基づきながら、主体的に周囲の環境と関わることが大切であり、その資源となるのが遊びである。子どもが主体的に遊び、その遊びが充実するための環境づくりや援助のあり方を考えることは、どの園にとっても重要な課題の一つである。子どもが主体的に遊ぶための保育者の援助について、河邊³⁾は、ただ自由にさせておけば主体性が育つわけではない。もちろん保育者が子どもの行動のレー

ルを敷いてしまったのでは主体性は育たない。「子どもの主体性」と「保育者の援助」は一見矛盾し、その接点を見出すことが難しい問題である。遊びは子どもが自ら選んで行うものだが、子どもの自由とあって放っておくのではなく、常に保育者による理解と援助との関係の中で子どもの主体性は育つのであると述べている。子どもたちが主体的に活動するための保育者の理解や援助、主体的に関わりたくなる環境づくりなど、見直さなければならない点は多くあると考えられる。

そこで、本研究では、子どもたちが主体的に活動するために保育を見直し、園全体で取り組んだS保育園の活動事例を通して、保育者の変化と子どもたちの姿に焦点をあて検討し、考察することを目的とする。

2. 研究の方法

保育園の保育場面への参加及び保育者へのインタビュー調査と保育場面の記録・振り返り記録をもとにした分析・考察を行う。

研究対象の保育園について

S区にあるS保育園は0歳児9名、1・2歳児各11名、3～5歳児まで各12名ずつの少人数保育を行う認可保育園で、子どもたち一人ひとりの心に寄り添う保育、子どもたちの「やってみたい」という主体的な学びを大切に、目の前にいるその子どもの興味関心に合わせた保育を大切にしている。

(1) 保育場面への参加と観察

2019年6月から11月に6回の保育への参加と観察を行った。1歳児クラス、2歳児クラス、5歳児クラス、に一回ずつと全体の活動への参加、夏まつり、渋柿取りにも参加して、観察と記録をとった。

(2) 担当保育者へのインタビュー調査

保育参加後、担当保育者にインタビューを実施。また、保育者が記録をもとに振り返りを行った後で、数回のインタビューを行った。

その日の保育内容についてや子どもたちへの関わりについて、まず、担当保育者から説明を受けた後、例えば「なぜ、ここでこのように声をかけたのか?」「絵の具の色をこの色にしたのはなぜか?」

「ここで、声をかけずに見守っていたのはなぜか?」等、具体的な保育について、聞き取りを行った。また、筆者も保育者も活動を写真に撮っていたので、筆者が後から写真を見ることによって生じた疑問についても、聞き取りを行った。

保育者たちは、自分の保育について、詳細な振り返りを行っていること、園内研修や外部研修に参加して報告書にまとめていることから、保育直後だけではなく、保育を消化し、客観的にみられるようになってからも、再度、聞き取りを行った。「子どものどのような言動に主体性の変化を感じているのか?」「自分の意識が変わっていくことは自分でわかるのか?」なども聞き取ることをした。

(3) 園長・副園長へのインタビュー調査

6回にわたる保育への参加と観察の際、毎回、保育観察前後にインタビューを行った。また、保育参加中には、保育や子どもたちについての説明もしてもらった。

園長には、園としての方針や保育を見直すきっかけや、子どもたちが主体的に活動するために行っていること、変えてきたことなどの経緯や職員の研修制度、会議や記録の取り方等についても話を聞いた。

副園長には、単独で、自身が葛藤してきたこと、意識が変化していったことを中心に6回、毎回、聞き取りをお願いした。

3. 活動事例と考察

〈事例1〉タンポを使った遊び(2歳児クラス)

2歳児クラスの6月。保育者はいろいろな描画材に触れてほしいとのねらいから、「タンポ^{注1}」を初めて出した。子どもたち一人一人に手渡すと、そっと触ってみたり、興味を持っている様子であった。しばらく、タンポそのものと触れ合ってほしいと思い、しばらく、そのまま見守ることにした。

子どもたちは床に座って、手のひらでなでたり、自分の頬や膝を軽くたたいてみたり、「気持ちいいね」「ホカホカしているね」と、感触を味わっている姿が見られた。タンポの感触を味わい、友達ともおしゃべりが弾んだところを見計らい、保育者は絵の具を出して、「タンポに絵具をつけて、ぼんぼんってやってみようか?」と

投げかけた。初めてのタンポ遊びなので押すことに集中できるようにと、机に黒画用紙をいっぱい置き、白の絵の具1色を準備した。

黒の画用紙に白の点々が描けることがおもしろいようで、どんどん描いていく。そのうちに両手に持って描いたり、筆のように線を描いたり、それぞれのやり方で遊び出した。友達と隣に立ち、一緒に同じ線を描いてみる、お互いに線を交差してみるなどの遊び方も見られた。

黒の画用紙画面がいっぱいになると、白絵の具が入っていたパッドの中でタンポを使って絵の具を混ぜ、「クリームですよ〜」「おいしいですよ〜」とクリーム作りが始まった。数日前にクラスの友達が誕生日で、お祝いをしていたこともあり、「お誕生日ケーキのクリームですよ〜」「みんなでクリームを作ってお祝いしよう」と発展していった。最後にはタンポで白絵の具を混ぜながら、みんなでハッピーバースデーの歌を歌い、活動は終了した。

〈保育者の変化と子どもの姿〉

保育者自身の振り返りとインタビューで、担当保育者は「以前は、タンポはスタンプのように使って遊ぶもの、パッドの中で遊ばないで紙に描いてほしいという先入観があった」と言っていて、「タンポそのものの感触を味わうということもしなかったと思う」と述べている。「なぜ、感触を味わう時間を十分にとったり、パッドでのクリーム作りへと活動が変わっていったことも自然に受けとめていたのですか？」という問いには、「材料や素材、描画材などを経験してほしいので、子どもたちに提供はするけれど、これはこう使わなければいけない、こういう作品を作らなければいけないということを考えなくなったからだと思う。子どもたちは環境や素材を用意すると自分たちで遊びを作っていくことが体感としてわかってきたことも大きいと思うし、子どもたちがやりたいと思うことを一緒にやったり、そばで見ていることは私たちも楽しい。」との答えであった。

子どもたちは初めて出会ったタンポの感触を存分に味わい、「気持ちがいい」「ホカホカしている」と自分たちの言葉で表している。そして、タンポを用いて、絵の具でスタンプングをしたり、腕を大きく

使って描いたりする。黒い画用紙に白い点々や線がどんどん描かれていくことを楽しみ、そこから友達との会話も生まれていく。一緒に描いてみたい、一緒に描いたら楽しいという経験をして、それはクリーム作りへと発展していく。友達の誕生日を保育園で祝ったことから連想し、誕生日ケーキのクリーム作りへと連なっていく活動は、自然発生でのハッピーバースデーの歌を歌うことで終わっている。

この一連の子どもたちの活動の流れを、保育所保育指針⁴⁾の第2章保育の内容・1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容・感性と表現の領域「表現」を中心に考えてみる。保育所保育指針「表現」のねらいの解説にもあるように、「子どもは、環境に関わりながら、身近にある様々な人や物、自然の事象などについて感じ取ったことを基に、それらのイメージを自分の中につくっていく。そうしたイメージを蓄積していくことで、目の前にないものも別のもので見立てたりできるようになる。心の中にあるイメージを、自分なりに表現しようとするようになる。このように身近な環境と関わり、感じ取り、イメージを形成する力が、表現する力や創造性の発達の基礎となる。」内容「生活や遊びの中で、興味のあることや経験したことなどを自分なりに表現する。」では「保育士等は、こうした子どもの表現する世界と一緒に楽しみながら、そのイメージを広げるような関わりをすることで、更にその表現が豊かになっていくように援助する。また、それぞれの子どもの表現する世界を大切にしながら、保育士等が仲立ちし子ども同士の世界をつなげることで、それらが共有され、ごっこ遊びなど友達とイメージを共有した遊びへと発展していく。」とある。子どもたちは様々な素材に触れて、感触を味わい、諸感覚を働かせていくことで感性を育てていく。

ここで、保育者の最初のねらいはそれであったであろう。「初めてのタンポの感触を味わって、楽しむ」ことを目的にタンポ遊びを準備している。タンポに触れて遊ぶ時間を十分にとったことで、子どもたちはその感触を自分の中で感じ取り、パッドに絵の具が出てきたら、早速、絵の具を用いての遊びに進んで行く。そして、描く遊びを楽しんでいるうちに一人の、イメージが膨らみ、その

イメージを友達も保育者も共有したことで、遊びはクリーム作りへと形を変えていく。この誕生日ケーキのクリーム作りは、ごっこ遊びの芽ともいえる活動ではないだろうか。先にあげた保育所保育指針⁴⁾「表現」(イ)内容⑥にあるように、子どもたちの遊びは、「ごっこ遊びなど友達とイメージを共有した遊びへと発展していく。」のである。

保育者がタンポ遊びでのねらいは「タンポを知り、タンポで描いて楽しむこと」と狭義で捉えていたら、このイメージから広がる遊びへは発展しなかったと考えられる。保育者はインタビューの中で、「今までは、せっかく作品ができたからと途中で子どもたちから作品を引き取っていたこともある。」と述べており、思いもかけない子どもたちの遊びの変化を見ることはできなかったのである。保育所保育指針⁴⁾「表現」(イ)内容⑥には、「保育士等は、こうした子どもの表現する世界と一緒に楽しみながら、そのイメージを広げるような関わりをすることで、更にその表現が豊かになっていくように援助する。」とあるが、保育者が何か言葉をかけたりするような積極的な関わりだけではなく、この事例にあるように、子どもたちが遊ぶ中で繰り返していき姿を見守り、時間を十分に確保することも「更に表現が豊かになっていく援助」といえよう。

保育者は保育後のインタビューで、次のようにも述べている。「子どもたちと遊んでいると『そういう遊び方もあるんだ』と気づかされることがある。」「今までは大人の先入観があったのだとも気づかされる。」主体的に遊んでほしい、自由な発想を大切にしたいと思っても、保育者に先入観があったり、この遊びの終わりはこういうものと決めてしまっていると、遊びは発展しないし、子どもたちは遊びきった満足感や達成感を味わうことができないであろう。保育者が意識を変えようと自覚することから、子どもたちの興味関心に沿った主体的な遊びが展開されるということである。

〈事例2〉段ボールで遊ぶ(2歳児)

2歳児の7月。子どもたちが自由に遊べるように準備してある素材の中から、段ボールを選んで遊びが始まる。箱型の段ボールに一人の子が入ってその中から、

周りを見ていると、もうひとりの子がすぐ隣に段ボール箱を持って行き、その中に入る。二人は向かい合って、「お家みたいだね。」と自分たちだけに聞こえるくらいので話している。2歳児がぴたりとはまる程度の小さめの段ボール箱だったのだが、段ボール箱に入っていることがうれしいようで、笑顔でじっと向かい合っている。3人の女兒は、開いた段ボールをついたてにして、その中で絵本を読み始めた。1人が読んで、他の2人が聞くという読み聞かせのような関わりを交代でしている。そのそばでは、段ボールを開いてお昼寝ごっこも始まっており、赤ちゃん人形を隣に寝かせ、寝かしつけの場面がみられる。そのうちに一つの段ボール箱に2人で入ったり、段ボールに乗った友達を引いて遊んだりも始まる。あちこちで、いろいろな段ボール遊びが展開されていった。段ボールの形が変わることがおもしろいようで、形を変えて関わることを楽しみ始めている。やがて段ボールが柔らかくなってきて、扱いやすくなってきたのか、室内の好きな場所で好きな姿勢で段ボールに絵を描き始める。様々な描画材が選べるようになっていたが、フェルトペンで描く子が多い。一人で黙々と描く子もいれば、「こっちも描く？」などと会話をしながら描いている子もいる。

〈保育者の変化と子どもの姿〉

子どもたちが素材を使って遊べるようにという配慮から、保育室には段ボール箱、紙類、空き箱、描画材等が用意されている。粕谷⁵⁾が取り上げているように、入園して間もないころや年齢の低い時期には、素材への興味から素材自体に親しみ、素材が持つ特性に体験的に気づいていく。(触る、並べる、積む、こねる、叩く、投げるなど)その後、素材のある物に見立てたり、意味付けしたりして活動に中の取り入れていく。さらに友達との活動が盛んになる時期には、友達の作る物をまねてみたり、友達と同じようなイメージのもてる素材を利用して遊びを進める。したがって、保育者としては「素材に繰り返し触れ、親しんでいく探索過程を大切に。」必要がある。これは、「幼稚園教育指導書増補版」⁶⁾からの抜粋で、粕谷は、概念的には妥当なものであるが、モノに関する具体的記述が欠けているとして幼児の具体例を挙げている。2歳児は幼児ではないが、年齢の低い時期にはとあるように、

段ボールを自由に使って遊びを展開していく2歳児の姿はこの過程に当てはまるのではないであろうか。段ボールへの興味から段ボール自体に親しみ、触ったり、並べたり、積んだりしていくうちに、ついでに見立てて空間を作って遊んだり、布団に見立ててごっこ遊びに進んだりしている。また、友達と一緒に描くことも始まっている。

保育者はここでも述べられている「素材に繰り返し触れ、親しんでいく探索過程を大切にする。」ために、素材に触れられる環境を準備して、子どもたち一人一人がそれぞれに関わることができるようにしている。この場合も、2歳児全員が段ボールで遊んでいるわけではなく、1人が遊び始めた段ボールを見て、周囲の子どもたちも遊び始めている。そのまま1人で遊び続ける子もいれば、数人でイメージを共有して遊ぶ子もいる。保育者は子どもたちから話しかけられると、「いいね。お家で絵本を読んでいるんだね。」「赤ちゃんは何歳なの?」と応答していた。中には、大きな段ボール箱の中に入り、屋根に見立てて、寝転んで絵を描いている子もいた。「自分の好きな場所で好きな姿勢で描いているんだなと思っていました。」と振りかえっているように、2歳児が自分で場所を決めて楽しんでいる様子を喜んでいることがわかった。インタビューで、保育者が「これをしよう」と投げかけるのではなく、素材を使って遊ぶことが多くなったと述べている。そして子どもたちは、素材で遊ぶことが増えたことで、見立て遊びやごっこ遊びへ発展し、自分で工夫して遊び用になったと感じていた。存分に素材と関わることで、素材の特性を知り、この経験が幼児期の表現につながっていくことが体感としてわかったとも述べている。

体感でわかるということは、時間のかかることでもある。今日一日、子どもたちが素材と関わって遊ぶ姿を見たからといって、わかる事ではないし、また、1年を通したから絶対にわかるということでもないであろう。「今日もこれで遊ぶの?」という言葉を読み込んだこともあると述べている保育者もおり、子どもたちが何でどのように遊ぶかということは計り知れない。その間には、行事があったり、保育者から投げかけて何かを作る日もあるであろう。そのような中でも、基本的には子どもたちが主

体的に遊ぶことを尊重するという一貫した思いがあり、そのための環境を準備して見守っているという保育者の姿勢があると読み取れる。ここでも、保育者が意識を持つことが、子どもたちの主体的な遊びを支えているといえよう。

〈事例3〉夏開き

「夏開き」というのは、6月の土曜日に行われる保護者参加の行事で、園庭で絵の具遊びや水遊びを思い切りしようという趣旨である。準備から片づけまで、子ども・保護者・職員全員で行うことで、子どもたちが遊ぶ様子や保育園の様子を保護者に知ってもらいぬらひも含まれている。お父さん方が園庭にテントを張ったり、お母さん方が絵の具を溶いたり準備をしたり、我が子だけではなく、様々な学年の子どもたちと関われるようになっている。

壁一面に立てかけられた段ボールに絵具で描いたり、塗ったり、身体にも絵の具を塗ったり、その絵の具をホースで流したり、水鉄砲で流したりと水着姿の子どもたちは普段以上に思い切り遊ぶ姿が見られる。保護者も子どもたちに顔に絵を描かれたり、一緒に遊ぶ濡れになって遊んだり、主旨を理解して参加している姿が見られる。

〈保護者の変化〉

園行事なので、夏開きの内容や主旨は園からのお便りや保護者会で説明されているが、新入園の保護者は驚くことが多いという。保育園なので、最大6年間の通園期間があり、年長児とその保護者がリーダーとなり進めていっていることが見てとれた。

保護者からは「自分が楽しかった」「子どもたちがいつもこんなふうに遊んでいるということがわかった」「先生たちは大変ですね」「汚れて帰ってくるわけが理解できた」等の声が寄せられ、保育や子どもたちを理解することの助けとなっていること、保護者自身も発散して楽しめること、我が子以外とも交流できること、保護者同士が交流できる等のメリットがある。

この行事を続けていくうちに、保育園の目指す「子どもが主体的に遊ぶ保育」への理解が深まったと保育者たちは感じているという。大人も実際に体

験することが大切であることがわかる。また、生き生きと遊ぶ子どもたちの姿を見ることは説得力があるのであろう。園と家庭の連携については、幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領でも述べられているが、保育所保育指針⁴⁾ 2 保育所を利用している保護者に対する子育て支援 (1) 保護者との相互理解イ 保育の活動に対する保護者の積極的な参加は、保護者の子育てを自ら実践する力の向上に寄与することから、これを促すこと。とあるように重要な取り組みである。しかし、保護者の就労や生活の形態は多様であるため、全ての保護者がいつでも子どもの活動に参加したり、保護者同士が関わる時間を容易につくったりすることができるわけではないことに留意する必要があると保育所保育指針にあるように、この行事を行えば、保護者理解がうまくいくわけではない。行事を通して、保護者と保育や子どもの姿についての理解を深めていく努力が必要である。また、当保育園では、保護者の半日保育士体験として、保育参加の機会も設けている。年間で30名の保護者が、保育士として保育に参加するものである。行事とは違って、普段の保育の様子を体験することにより、一層の理解が深まることが保護者の感想からもわかる。体験した保護者からその様子を聞くことで、体験できない保護者も理解を深める手立てとなっていると考えられる。

保護者の理解が進んだと保育者たちが感じる要因の一つは、保護者が子どもたちと一緒に体験したことにあると考えられるが、この体験をもとに、体験できなかった保護者にも保育所保育指針にあるように、日常の保育に関連した様々な機会を活用し子どもの日々の様子の伝達や収集、保育所保育の意図の説明などを通じて、保護者との相互理解を図るよう努めたことにあるのではないだろうか。それでも、保護者から、遊んでばかりいて、小学校に入ってから大丈夫なのかという心配の声を聞くこともあるという。園の取り組みで、保護者の変化はみられるが、完全とは言えないことも示唆される。

〈園全体の活動内容の変化〉

2017年に現園長が就任した時に、園全体の活動内容を見直し、「子どもたち一人ひとりの心に寄り

添う保育、子どもたちの「やってみたい」という主体的な学びを大切にし、目の前にいるその子どもの興味関心に合わせた保育」を行うためにはどうしたらよいかを職員^{注2)}も一緒に考えたという。「子どもが主体的に遊ぶ保育」をするためにはどうすればいいかを考えると、やはり、大人の関わり方を考えることが必要であると思ったとインタビューで園長は語っている。園長本人は「子どもが主体的に遊ぶ保育」を実践している保育園での勤務経験があり、具体的にイメージできるものがあったが、職員にそれをどう伝えていくのかを考えることが当初の仕事だったと振り返っている。園長が行ったことは、保育者がどのような保育をしたいと思っているのかの聞き取りとその保育を実践するためにやっていきたいことは何かをまとめてもらう事だった。それと並行して、職員が他の保育園に見学に行く機会を設け、研修会にも参加できるようにし、また、保育園に講師を招いての研修会も行った。保育所保育指針に「職員の資質向上」という章が設けられているように、園長は施設長として、職員の研修機会の確保が責務となっている。職員の研修等では、職場における研修と外部研修の活用があり、研修を計画的に組み研修成果を保育所内全員が共有できるようにしていかなければならない。

外部研修に出向くだけでなく、「子どもが主体的に遊ぶ保育」を実践している保育園・幼稚園への保育参加、保育見学で職員が学ぶことは非常に多いと園長も職員自身も述べている。保護者が保育体験をして理解を深めるように、保育者も体験をすることで、理解を深めることができるのであろう。

これらを続けていくうちに、机の上で描いたり、製作したりしていた活動が、広くダイナミックに園庭や床を使って行われるようになったり、汚れないようにしていた活動が身体全体を使って感じられるように汚れてもいいという考え方の活動になったり、みんなで一斉に何かをしようとしていたものが、こども一人一人が興味を持ったことをやってみることに重点を置くようになったという変化が見られたという。こうして、子どもの姿をはっきりと認識できるようになり、「これでいいんだ」と園長も職員も自覚できたし、意識的に保

育を行うようになったとも述べている。園全体で取り組むことで、職員みんなで振り返りができたり、話し合ったりできる体制が整うといえよう。

〈副園長の変化〉

園全体で「子ども主体で」と活動内容を見直し、職員・保育士が意識的に取り組むようになっていく中で、副園長はインタビューで「私が一番、苦勞したと思う。」と述べている。園長が交代した時にすでにこの園での保育歴が20年を超えていた副園長は、「自分が納得するまでに時間がかかった。」と言っている。

「子どもが主体的に遊ぶ」保育をしていくために何ができるだろうと問われたときに、「今までは主体的に遊んでいなかったのか？」と思っただけ、自分の今までの保育は何だったのだろうかと思わなくなった、と述べている。子どもたちが主体的に活動する大切さは、以前から重要視されていたし、誰もが目指すものである。園によって方法や手段が違うだけではないかと考える保育者も多いのではないだろうか。そこで、「では、どうやって、その自問自答から抜け出して、今の保育に至ったのですか？かなり、大きな葛藤があったのではないのですか？」と投げかけてみた。すると、若い保育者が考えて保育をしている毎日を目の当たりにしたこと、子どもたちの姿が変わっていくのがだんだんにわかったこと、自分も研修に参加したり、他園に保育参加をして具体的な保育の方法がわかったことなど、様々なことを時間をかけて理解して体得していったと思うと振り返っている。一緒に遊んでいて、自分も楽しいし、子どもたちも楽しそうなのがわかって、それがうれしかったし、これでいいんだなと思った。その中でも一番、強く印象に残っているのは、子どもたちがいつの間にか、「やっていい？」と言わなくなったことに気が付いたときで、以前は「やっていい？」と聞かれることが多かったと思いついた時であるとの振り返りである。

子どもたちが主体的に遊んでいても「やっていい？」と尋ねる場面はあるであろう。

初めて使うものや、いつもとは違う使い道で道具を使ってみようとするときなど、尋ねられることが

ある。だが、そのような場面では、「使ったことがないけれど、今日はこのために使ってみよう。」「今日はいつもとは違って、こういうふうはこの道具を使いたいんだけど、いいかな？」というような尋ね方になる。そこには子どもたちの「やってみたい」という主体性が見られる。副園長はこのことに気が付いたとき、今までが間違っていたのではなく、変えていけばいいんだと思って、気が楽になったと述べている。もちろん、簡単にこう思えるようになったのではないとも言っていて、何かをする時に必ず自分で意識して行うことを繰り返しながら、自分の中で自然なことになっていったとのことである。ここでも、意識の変化ということが重要であることが見てとれる。

川田⁷⁾は事例研究で、「当初、子どもとの関係づくりにしっくりこない感じがあったり、管理的な視点がやや出すぎてしまったりする中、事例検討を軸にした園内研修を積み重ねました。子どもの主体的な姿とはなんだろうと改めて考えていくと、むしろ保育者自身の身構えが変わってきました。」という例を紹介している。「～しなければならぬ」という視点が強すぎると、子どもと心が離れていきがちです。保育者自身が「いま、ここ」で生まれる遊び心に素直になると、不思議なことに、子どもと一緒に遊ぶ世界が開かれていくようです。とも述べており、まさにこの感覚が副園長が体感した感覚であると言えよう。

4. まとめ

S 保育園が子どもが主体的に活動することを目指して行っている取り組みを、事例とインタビュー・振り返りを通して検討した。保育者が子どもの主体性に重きをおく保育をしようとする時に重要なことの一つは、そのことを意識することにあることがわかった。「何してるの？」と聞くことより、子どもたちのつぶやきに耳を傾けるように心がけたという言葉からもわかるように、子どもたちが感じていること、楽しいと思っていること、興味を持っていること、次にやりたいと考えていること等を側で保育者が感じ取ることを意識的に行うことで、子どもの姿がよく見えてくる。よく見えてくることで、子どもたちの興味・関心に寄

り添うことができるようになり、その結果、子どもたちが主体の保育が展開されるようになる。そして、そのことを保育者が体感できるようにもなるのである。保育者が体感していることは、記録や振り返りの話し合い・園内研修で確認されて、園全体で共有される。これらのサイクルは決して、早いものではなく、これでいいのかと不安になることもあったという振り返りからもわかるように、簡単に結果の出るものではない。それでも、意識的に保育をしていくことで、自信を持って子どもたちのしていることに共感して一緒に楽しむことができるようになるのである。

ここで注意しなければいけないことに、子どもたちが主体的に遊ぶ姿は、自分たちから積極的に活動することだけではないという点である。川田⁷⁾も述べるように、「主体的」という意味を、自分から積極的（アクティブ）に活動することだと考えてしまうと、子どもにとって意味のある経験を狭くつかんでしまうことになる。まして、「大人にとって都合のよい姿を演じている子を、主体的であると見誤ってはならない。」のであって、みんなは楽しそうにやっているけれど、今はやりたくないという子や、見ていることを楽しんでいる子などの主体性を否定してはならず、読み取って受け入れていくことが保育者には求められる。

山本⁸⁾の研究にあるように、個性を持ち合わせた子ども一人一人と向き合い主体的な活動を支えることはたやすいことではない。保育者は子ども理解に基づき、様々な援助タイプ^{注3)}を創意工夫して応答的に保育を展開していくことが、子どもの主体性を育てる鍵である。子どもたちとの日常に援助することは多々あるが、子どもの主体性を意識すると、援助の方法やタイミングが違ってくるであろう。どのような言葉をかけるのか、どのような援助をするのかという関わり方が、変わってくるのである。

保育者の意識の変化を支えるために重要だと思われるのが、保育者の専門性の向上の側面である。園全体の活動内容の変化で取り上げた、「職場における研修」「外部研修への参加」の他に、「キャリアパス」である。保育所保育指針には、新たに、「各職員のキャリアパス等も見据えて、初任者から

管理職員までの職位や職務内容等を踏まえた体系的な研修計画を作成する。」ことが明記された。S保育園でもキャリアパスを踏まえ、人材育成計画に沿った研修受講を全員実施し、それぞれの役割の実践に役立っている。研修は園から推奨されるものと保育者自身が選んで参加するものがあるとのことで、今の自分に必要だと考える研修に参加している。保育者の学びについて、井上⁹⁾が次のように述べている。「保育者にも学びのスイッチが入る瞬間があるということです。それは、目の前の子どものためにというスイッチです。子どもの生活や発達を支えるために、いまの自分では及ばない何かに出会った時、葛藤しながらも、真剣に学び成長して、子どものために～ができるようになりたいと保育者は心から思うのです。」そして、「こうなりたい、学びたいという保育者自身の思いに基づいたものではなく、計画や職位といった外側から与えられた動機付けに基づいて学ばなければならなかったら、保育者はどう感じるのでしょうか。」

S保育園の副園長は職位に合った研修を受けると同時に自分で必要であると思った研修や他園の見学に赴いている。自分が学びたいことも計画の中に取り入れてこそその研修である。子どもたちが「やってみたい」と思うように、保育者も「やってみたい」と思えることが、保育者の主体性を育てると言えることも明らかとなった。

5. 今後の課題

S保育園の事例から保育者の意識の変化や子どもに対する関わりの変化を検討したが、この聞き取りや保育記録及び保育者の振り返りは今の保育現場で、子どもたちと保育者との関わりから見えてくることである。子どもの姿から気持ちを読み取り、その場での判断を求められながら、前に進んで行く保育者の姿が見てとれた。では、その判断や子どもたちへの環境の準備等を考えるもとはどこから来るのであろうか。もちろん、毎日の保育の中で、新人保育者も含めての保育者集団が考えて、行っていることは間違いのないのであるが、保育者となる者が養成校で学んでおくべきことは、どのようなことになるのであろうか。佐藤¹⁰⁾が述べるように、「養成校で造形を担当する指導者に

は、理論を形骸的に教えるのではなく、実践との往還のダイナミズムを実感させる工夫を行う仕事が課せられている。」なぜなら、佐藤が調査した保育者たちは、「養成校で習ったことと現場の子どもたちが繋がらなかった」と述べているからである。養成校の授業と現場の子どもたちを前にした時に、繋がるようにするためには、具体的にはどのようなことが必要であるのか、養成校で教わったことで実際に役に立っていることはどのようなことなのかを、具体例・実践例で調査し、養成校での授業に還元していくことが望まれる。理論と実践が結び付く授業を展開していくためにも、これらのことを今後の課題として、検討を重ねていきたい。

注

- 1) タンポとは、描画材の一つで、ここでは持ち手を割りばしにして、スポンジを布でくるんだものを使用している。筆とは違う感触が味わえ、小さな子どもにも扱いやすい。持ち手が割りばしで危険な場合には、プラスチック製の棒を用意したり、乳酸飲料の空き容器にスポンジなどをかぶせ、輪ゴムでとめてりょうしたりすることもできる。
- 2) 保育所には、保育士以外にも栄養士、看護師、支援員等、様々な職種の人が勤務している。S 保育園では、栄養士が食育のために、保育に関わることも多いので、職員と表記している場面もある。
- 3) 山本は、「保育者の援助には直接的、間接的な関わりがあり、その中に多様なタイプが見られる」という点においては、子どもを中心にして観察した場合、直接的、間接的に関わる保育者の援助は「関与なし」「見守る」「受容」「協同」「示唆」「誘導」「主導」のタイプの援助があると述べている。山本淳子「子どもの主体性と保育者の援助のタイプの検討」大阪総合保育大学紀要第9号 2014年

引用文献

- 1) 保育ナビ4月号 特集「新3法令実施!法令を保育現場にどうつなげるか」フレーベル館 2018年
- 2) 中坪史典「主体的に遊ぶ子ども—遊びを支える保育者〜かえで幼稚園の実践から学ぶもの〜」エイデル研究所 2016年
- 3) 河邊貴子「遊びを中心とした保育」萌文書林 2005年
- 4) 保育所保育指針解説 フレーベル館 2018年
- 5) 粕谷亘正「遊びにおける素材のもつ意味」東京学芸大学 Children's Museum 楽校第2回講義レジメ
- 6) 幼稚園教育指導書増補版 文部省 1988年
- 7) 川田学「どう変わる?何が課題?現場の視点で新要領・指針を考えあう」大宮勇雄・川田学・近藤幹雄・島本一男編 ひとなる書房 2017年
- 8) 山本淳子「子どもの主体性と保育者の援助のタイプの検討」大阪総合保育大学紀要第9号 2014年
- 9) 井上眞理子「どう変わる?何が課題?現場の視点で新要領・指針を考えあう」大宮勇雄・川田学・近藤幹雄・島本一男編 ひとなる書房 2017年
- 10) 佐藤絵里子「保育現場が求める日本の保育者養成校における造形教育の学びと課題に関する考察—グループインタビューに基づく質的分析及び質問紙調査による量的検証から—」美術科教育学第39号 2018年